

60 1 2 3 4 5 6 7 8 9

80

1 2 3 4 5 6 7 8 9

70

1 2 3 4 5 6 7 8 9

1
775
—
95

水鏡

上



曾
775
95

水鏡卷上

高
同
書

- 一 神武天皇
二 緋靖天皇
三 安寧天皇
四 懿德天皇
五 孝昭天皇
六 孝安天皇
七 孝靈天皇
八 孝元天皇
九 閔化天皇
十 崇神天皇
十一 景行天皇
十二 仲哀天皇
十三 成務天皇
十四 神功皇后
十五 仁德天皇
十六 及履中天皇
十七 允恭天皇

大正二年一月
中村猪雄氏贈

高
同
書

サ一 安康天皇

サ二 清寧天皇

サ三 顯宗天皇

サ四 武烈天皇

サ五 安閑天皇

サ六 欽明天皇

サ二 雄略天皇

サ三 飯豐天皇

サ四 仁賢天皇

サ五 繼體天皇

サ六 宣化天皇

ほへむきよへておれりそりくさは
もつむ下乃日龍蓋寺へまうでゆく處うてう後
よりもの暮よたそかとれ宿よぬりつきそり
小うれはりよはりく若くうだねて仰の
めとたありてをすく仰宿よううちまわされ
まよ初秋のかのむかおとくよとくよまく
ゆりて通夜待にせのむうちあつまは程
小懶り者の世に立すくやあくとくく
程以ひたくよとくよとくやあくとくく
いり野る人乃いづこよりふほくふぞは程をどのうを
せアつゝまやかじよとくのたまつむ

とつよけに残りありふやういつてゆゑあまうわ
を仰おほく歎すこ一抱のうへはそのうじ十餘年
せのあらぬふるなれどもむぐとみえゆるの
人まより後世ごせやたもあととかやうゆどひ
のうせゆめのごまことかげくたばくうり
きく事ことをうなじゆくはありりお
ゆきとゆくはくねとあうふけりれ
これあらゆきでせよ仰あき奇アキなりきあも
とまきく歎かたせ七十三ミツミと
もくがくらう人ヒトかくやうひづくばをう
ではやくとんでド後アフタとけゆくとく

せうよりはれりてきわカウたのう
じまう日まうりつるあがくかくせうまでせうは
きくがくカクてしシてまうりつるあくを
たくさくカクすのあくをかくよくねひ
たくさくカクはまうりかくわくよのとてく
てひみてヒミテとあんと思ひうちくさんハシニの
わくをれカレとやうゆ後世ごせよがりゆん養ヤウ藏ザウ
ゆくと人ヒトあひそまうりゆうひあくはくを
せそくじく人ヒトのうウゆもあきなまふ人が
きはまうりかく事ことありけ居アリといふよ

誦
あてまつりかたのから人か守れの
うてゆごめんかごくせわれを誦
うほと誦たまに月に九月
トム月のりかかさりゆねやのまうたふ
きみとまばなきねのま
けやせ祚びきらうめりめりとめも
竹乃はえをつきたるまくられあらりりや
りきよりゆくゆくゆくゆく
竹とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

にとむかうがと又一部と通じたうをゆへりかど
は仙人うみあひく門りしはんねおもかきせざと
ゆくとく佛道とゆけほよ西んとくまとまう
さうだうやくたれと仕かりゆうれい事かとんとおこ
トうめびくとぞとひかじまじよばふくに
中へ成仙人として作とゆあまゆあり大かく今
の世はけかくとくみほむくがく（きかく）家
あくうりえんとあくくわらうすゞく二界へは
ゆき事かりとくわうち（あはむま）のせうありま
えたりうきかひてやまがくと形りゆるゆ
くをはれいアセモは（えよ）く御代うま

かづくにうき山かくと紙すくふくしてはくきかくりと
あくとくふやのありゆを徳重よりかまどえく
あもむけ候うかき事がく小竹とむほ理ばうを
たすりゆく取よむとくせんまのやくぼうりをく
うゑふんたうとく筋り（くき）とくとくとなりえん
あわと一ちぢりゆくゆれだすりゆくとアキラセ
とくちの執心とくとくあひとまうかと佛なよす
みほがくとくかまうをくわゆも神りせうちえゆ
がくくや何んとくのくくくくくく（ま
事かう生年かくとまごたくろまうくくく
せよまうゆぐりひゆくとけくくくもく

事かんづくをすとすりきだあうじきのま
もと來とあつて日と月との運行より、あ
のとから人間がたりは、やとときくにのせ中、
ひふあくにまとゆるがやんとあよもあよくわ
ゑるのみたれとて、まちづりわれだ一かく
えなべのせとあらんあらつゝとけどもて、ゆん、
ぐのまことせぬまくわゆつしもとよほ人かく
まほのせぬまくわゆつしもとよほ人かく
うとくとくわゆまくわゆつしもとよほ人かく
乃あらとくわてばざりくとけりとけりとけ
しまり前とけりつとをすりとすりとけり

次まづ劫の有無を以てせりすりせりとが
かくまづ劫とまづん人の命れ八万劫り、
百年とりよ一年の命のつまりて十劫り
よりと一の小劫はやとえ六十劫り又百年よ
年めのうちとくへ万劫よなうぬあきともの小劫
やアこの二お小劫とあるせと一の小劫
ゆくせれは、まづ内とて成劫と申てば、小劫と
とせやとせやとせりとせりとせりとせりと
とせりとせりとせりとせりとせりとせりと
ね光津とりよ天とてまづ天へまづ大梵王

もちかくあらち次第よやくありてすまほして
はるゝ人むきに餓鬼畜生出でてふか地獄をも
はるすうて成劫大劫をとりぬ世間も至
情を放りゆてアモラヨリ成劫よヤ也つざん
初とて又大中劫のやまとまにす但
一初ハ多穿アリをとまのゆきわづ
りとばに初月アリ人食ひし多穿アリ
アリ無量眾多そられより十尋までぢをせら
ゆもはるのゆゑす一方中劫のほりさとす二の
初十九の劫までりゆつやうす二方尋
三十尋よもよ十尋うち方尋よねり初月

侍也らまよサの劫八十界より八万界アでゆきる事
のくわりてをとれりあもとをくねやは一の
中劫たりこれより地樹アで成劫アリル也
のゆりて有情のうゑにまかまつて住劫アリ也
はまふ壊劫アリ也此はまくサの中劫アリ也
アリル十九劫アは地樹アリ也有情アリ也
ぬこの半アリ也此はまくセウルハマリ也
アリハタリ也天よりむアラムクアリ也地樹ア葉ね
はまく衆生アリ也ア三千界アチテアリ也
やまうりまくてもササア劫ア大アリ也モ風輪と
て風吹アリム不のうアリ梵天アモ山川アモ山川

されやけせぬとくにまほれ 壊劫とより
はまく 室劫とよりて又大の中劫のやまとせやまも
ちくておぞめのよきとてもくらすうきりなれど
室劫とより成住壠空の四劫とよりとくに八
十の中劫とすく一はまことの大劫とより
さりとくとせりりくいえすりくか
きゆとりゆね カルト
どあるてゆるうおじまきはまくの住劫申つ
かよ佛させよあくまくすりそのすく今か命ゆ
正徳ありかりとくに見とこれもふのまうてを
くようかますとあきと出没とく令をくたち

はまくわゆりあれどもまうりやくともあをうかひね
金戒と見らるむ経ひくかまくふうりこの住劫
ようてげづらへ劫とく佛とて行と原才九ノ減劫
ナセ佛のソドシまひりすり釋迦のソドシは
人の命百歳の内あそばせ九劫れむまくするな
まよくまよくすりお十八の減劫をドリテ弥勒菩
薩もんもんかりお十八の減劫ナ九百九十四佛と
さまよくまよくせよまくひく人多令も
果報もすりゆくばかりとくはゆくとくとてこの日
本國ようくよくやくせめくりとく事を仰りさ
うすなりてこのよくよくひくとく事を仰りさ

佛法より肉果りありてすとすやうへ
ありゆうやくがううえもあよりく佛法もうを
せりありてあともうくまうかくすうあくきこ
くつりのまはすうりせりむくひとくあ
なせよあくまやねどあくじき思ふゆく次万ちの
あらわい世継ヤシナリとくにれられやうく文徳
天皇よりのちはこれとくにさくすやをなる
トテアもくあくまうくにさくいとくにうどく
せばとく申さうきまとせやはきりまくに
きかくわすじきよだのせとせしののそくも
のをほみをゆんりよまの事とひくよがす

とくせばうね人のアトトマキト一かの嘉祥
二年よりひきめりとれうくアトモマヅル
の代七代うち伊勢太神宮の御世よりう法
契あらわもせんのとくすく五代めとせて十
ニ代のとくはあくもふわくり申さんつくりと
びりやほくゆゑて神武天皇よりアトマズ
きよりそのみゆくくサヨヒキヒアカツクの
サヨヒキヒ赤祥二年庚午カウエイねくまで千五百
二十二年よりすりぬむそのばとくとせ五十
代ぐれたくゆくさんまづ神武天皇より
てゆひきげゆ

まへ一々内裏うちりよまへ又またかへる三さんあり一い大神宮だいしんぐう
たゞたゞ戸戸は一いハ日ひああよよねねすす一いハ内裏うちりよよ
のの内内も内内也よすうれすうれゆゆれれききこのの月月本もと
をあさあさははゆゆききれれゆゆききここれれ内内時じすす
玉たますすててるるゆゆかかわわ往むかははせせと
一い年ねんそそ釋迦しゃか佛ぶつ溫般ねんぱんよよりりひひくくののううニ
百九十年ひゃくきゅうじゅうねんよよああづづ侍まつされされれどど世よああづづききううや
思おもふふとと佛ぶつのの在あせせよよももううききけけままとと
ややせせののすすくくととははゆゆりり富とみみ

中二綏靖天皇
世三年五月崩年八十四
十月葬大和國桃花島田岳陵

ひれりぬるやうれうとくうてひらへる内
ふのえいすかりゆあふれこの力はやうとま
あふなりともんとひよりてもあくとぞれん
ぢあさあくわうめうあふとすぞうすく
玉すらやう小位は浦を珍みてゆるいよか
尽位と極りきれりいせんにゆりぞとせき
一経へりくがむほせよのアラヤあふ乃活
すく次りて位のきはくちり

オミ安寧天皇大八年十二月崩年五十七
明年八月葬大和国御張井上陵

はぶれみゆ安寧天皇とやき、裕清天皇を御子
安皇太后宮五十鈴依媛あり、裕清天皇の世大

五年正月戊子日東宮より立終の年十一月見え
ゆきせ渡りてあくは年十月廿一日を位よつま
結ひ、即年廿世となり渡り年三十八年也
オ四懿德天皇大四年九月八日崩年七十七
葬大和國織砂溪上陵

はきれみゆ懿德天皇とやき、安寧天皇の母の
皇子即母皇后渟名底中媛かり安寧天皇の母也
年正月壬戌日東宮より立終の年十六辛卯年二
年うり世二年と申ゆをれみゆせたすひけふと
うけゆも

オ五孝昭天皇

大十三年崩年百十四
葬大和國坂上博多山上陵

はまはくらむ孝昭天皇とアモ懿德天皇乃御子
沛母皇太后宮天豐津媛也懿德天皇大二年三月戊
午日東宮よりキモリ御内ト一十八丙寅歲正月九日
位より御内御内ニ十二世となりとせむす八十
三年なり

オハ孝安天皇 百二年崩 年百廿七
葬大和国玉年峯上陵

はさのみと孝安天皇とアモ孝昭天皇乃二皇子
沛母世襲足姫より孝昭天皇乃世八十一年正月
東宮より御内御内シテ御内ト一女己丑年正月十
二日辛卯位より御内御内ト一十六世となりとせ
むす百二年

オセ孝靈天皇

七十六年崩 年百二十四
葬大和国序岳馬坂陵

次ノ又のと孝靈天皇とアモ孝安天皇第一の御子
也母皇太后姉押姫より孝安天皇乃世七十六年正
月正月東宮より御内御内ト一女六十九年正月
御内御内ト一正月二日モ位より御内御内ト一
一五十三位となりち御内ト一七十六年ナリハ世
トアモ御内御内天皇御内御内精舍ノ左にては旗育
迦王の御内御内御内御内御内御内御内御内御内
者御内御内御内御内御内御内御内御内御内御内
御内御内御内御内御内御内御内御内御内御内御内
御内御内御内御内御内御内御内御内御内御内御内

是は是を以てとぞゆえ

オハ孝元天皇

五十七年崩年百十七
葬大和国輕鈴池島上後

次乃みく孝元天皇トヤシ孝靈天皇ノ子也
皇后宮細媛也孝靈天皇の御世廿六年丙午正月
東宮之三歲也廿九年十九丁亥のトニ正月十四日又位小
院也終ふ廿八年辛酉歲也五十七年十九
辛亥年七月六月也

ノムラアキルヘ

オ九閑化天皇

六十一年崩年百十五
葬大和国春日率川坂本陵

川きのアラヤ開化天皇ト申シ孝元天皇ノオニ孝
母御母皇后櫻齋色譲命ナリ孝元天皇の御世

廿二年正月より東宮より下候由中ノトニ十六冬未ウ
十二月十二日位につき候由廿年辛十一世トモト候由中六
十年は中よめ候トモト御母也南天皇より龍種善薩
トモ僧のアササガコトナケルアツリ

トモトヒトモテ西京トと稱育迦王乃はトモト候由中

モト万年トヤリヘニヒトモト人や近づく事少リソジモ
トモト四十九歳のひすりそのうち十三年ありて六師
迦王又はトモト高(ホモト)セトモトアツリヘヒトモト候
由モト候由中十年をトヤリ候トモト候由中

オ十宗神天皇

六十八年崩年百十九
葬大和國山邊道上後

次乃ニシテ崇神天皇トニテ開化天皇第二の御子也
皇后伊香色謹命ナリ甲申ノ日正月十日位
はき御内也ニ五十二世トモリ終ニテ六十八年カリ
六年トニテ御内物ナリテきりはアリナリ
又ヨリヒヨリナリキ物ナリトモムナリタニミ
くヨリヒ日教もゆうわきあくわうとて諸國より
をばくをよまニテ二年トニテあらわし
天皇より王太子として祇園精舎ともばりて人とこ
うじふとゆめおほりく四天王沙竭羅龍王、
ガリとねしてあらうけふんとわざから石とども
てをくわゆ行ひけるもうせアツリウリ

ミテ十五年トニテにくぬの木あき出たりま
くちりんみるやかうりてく事よと
てくづり次れくゆく

オ十一番仁天皇

九十九年崩年五十一
葬大和国漆上郡伏見東陵

次乃ニシテ齊仁天皇ト申キ崇神天皇オニル也子
伊母皇后御内城姫ナリ崇神天皇四十八年四月
内室の御内也東宮より御内也四十三
サ壬辰ノ年正月二日位ナリはき御内也ニテ四十三
世トモリ御内也十九年ナリ四年トニテ内室
みのうち御内也トウヒヒム所ナリ御内也
内室と夫ともあきとモヤハニテゆく四十九年也

ト候ふよ居ふる事あらずとてうへり
まいたまのきとの候ふてじぬふの居ふ
あらばをうは我をもうてぞりりうる故
すりせゆかくもくられどとれよ人とか
はれゆりて候と我往りにかじせよたりせん
往きせゆと帝心ゆ承りてまつるてえうと
うをひそまうをうとほんとぞりて居ふ
まそまうり候ひり居あくゆをねうくわが
被どかくひひけられわんとおどきびえわくわ
てほのよばうのうちふはうとがくとて初と
かひ候ふあくはれ十月よりかたにわき

おとしゆく行といひおゆのぢりあくにあら
ふかあぐふかふてとねくにあづくあく
くさりてえりとれゆふまがくまくばくやくもく
きほひのゆくわくとめくわくたのきれこくち
あくとくくびとまうふとく行又おがくとくお居
かくとくおがくとくがくとくとくとくとく
ゆふとねくわく小居えかくとくとくとくとく
ゆくひがくとそれとひて取ひしゆとくあくま
の事とやとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

是事より七年後すひに
ありやう十五年と申内候よすまた
が一忍のゆひもあんねをかくとれとえ
まゆも、(キナ) もかせむを
角にやめ、(キナ) カドキムラ
力をせしわらはとふすすきをかたと
のくまをつりにゆきつゝ川をうごくと
うえやねば、(キナ) 戸うちたちやそほ
ゆくゆくはあくねのゆくゆくと
ようが、(キナ) ふとよとけよとけよ
もう人をうるうる年八月かゆのとく

ゆうとすとあわゆかくゆうりゆう
サヌ年ニヤに大神宮をけりて伊勢ノ國おん
すりしればりと經よゆるさうだま
れども石よりゆて作成よえり
たまめのあては神れどもへとけ
ゆき大年とゆるよの牢の
ひふを経へとれねのせのあもとちくは
やまかととせりゆくもれを
アシカ人ひいきをがすとあまたまくま
ゆとみとみとみとみとみとみとみと
まかんとむらとむらとむらとむらと

ありてはるかにすとされしと紙をきくふう
仰き事かきりかへりすよりこれゆきづくらむ
乞とのびひとうれち玉師の氏の人ふと人乞
おねがひくすばくうさんんかきりまわゆ
したれやきもよどもうすひくふせりの姓とた
まをそりかうみの法大はく姓ひうた玉师の氏法
を系なり十二年この御子と名とて全こ
よくりと初利天皇の御子と名とて全こ
りて又はくうゑとうあくまづりりき佛をモ
内だくゆにとまうりそりとくそはく

き小ある九十三年と申一と後漢の明帝の時
夢よさげ称れ人きくゆくは説べてもくる年天竺
ちうけりて佛法りつう（後へりりめ）

東十二景行天皇

六十一年崩年百四十三
葬大和國山邊道上陵

次め入かと景行天皇と申是に天皇の御子也
子は母皇后月葉酔媛命也岳仁天皇の御世廿年正
月甲子日東宮より御内侍ふちくからくゆめりゆふに
申終ふやうとのく心よかよきえんとあふとあま
よあふれとこわきゆくやうりくをゆうとくすま
せくのみこれも皇位とすんえじとくとくとくすま
ふうのふよきとくとくとくとくとくとくとくとく

まつりをばくにとおあがむてたゞきのり
すねり辛未のト一月住よはる所は此年
二十四世とぞありたまゆる辛年也五十二年
小内寔わこちひ野ヨ成務天皇ヨミム
足と身と武内ヨミムヨ成務天皇ヨミム
みやまを絆ヨたゞくヨ足と身と武内ヨミムヨ成務天皇ヨミム
御ヨもひかひ心ヨたゞくヨ足と身と武内ヨミムヨ成務天皇ヨミム
むすびヨひくヨ心ヨたゞくヨ足と身と武内ヨミムヨ成務天皇ヨミム
て川ヨとめヨ心ヨたゞくヨ足と身と武内ヨミムヨ成務天皇ヨミム
望ヨくヨびねヨ心ヨたゞくヨ足と身と武内ヨミムヨ成務天皇ヨミム
かほもヨかほは後代ヨとくヨ心ヨたゞくヨ足と身と武内ヨミムヨ成務天皇ヨミム

てせよむ
たまうめり
あらはれに
かくは人よ
かくは年二
月よ近江の
宍穂あまの
内侍よびけ
ゆきありなま

十二 成務 天皇
六十一崩 年百九
葬大和國狹城柏原山

六十一崩年百九
葬大和國狹城楯列池後陵

次ノみと成務天皇トヤマ景行天皇ニホ四ノ御子
御母皇后兩道入姬也景行天皇ノ也セ歿十一年八月
壬子日東宮より立葬ノ辛未日也正月廿日成子佐
多岐守也四十九世祖也之ノ年三十
一年丙午からトモ、ふもんれ也一丈九尺也
武内少卿也丙午年と申そ大臣よりあ

十四仲哀天皇

九年崩年五十二
葬河内畠惠我長野西陵

はされど也仲哀天皇より景行天皇乃侍あり
日本武尊より御二方内子が御母
壬午仁天皇のちじめれ御成務天皇二十八年三月
ノホテキモウタヒニ申北正月より候ふ
佐久野御印年四十世とたりて御在り九年はア

もとく御所の内
かど武内内侍（う）
すよひて京ゆ

第十五 神功皇后

六十九年崩 年百
葬大和因狭城相列池上陵

次第乃ち也神功皇后ニカラシ開化天皇乃吉ひわと
なり仲哀天皇乃后それをセカリ即母萬木
高額坂辛巳代十月二日往つて既而之古帝ハ
あめ内附ノリテ世をたすり候す十九年
内公ノミヤウレニシテ世に至れ候てき仲哀
天皇代内附八年トキトノ小使
よはシテナシムヒテのスルニヤアリトム内日う
ヨリ國あり新羅トニシテセキリム後
モ國あり新羅トニシテセキリム後

皇后の事にあらうたゆかく
世とならぬ所の事
七月の神詫宣
御内侍殿の事
きはりよりて皇后にそぞせまひて涉
りどもかれニヨモトアヒ
わざりよ多モラヅニヤシ
候ふアリムとやくは因れ大事也

かうてひふみえけりやへかじ皇后そのくわを
りえほりんとてりとてはうにばくとくもん
ひて事をりくくうん日こむとくもん
とくううひほひあほどやりとくもん
まうせねりとくもん
たり仲哀天皇うせうを
れなぬをう二月せび本の十月かまをだぐか
すがりまくらとくもん
竹久元年正月辛丑日
新羅國より船アリ
うのうちかくわねきうり莫ど舟の
左右よひくわくさく風音にてとみや小り
かかにあくもて波のくまで新羅國のうちを

あぐりよへる内うち國の王をうどく下
をあくくしりりいまとあく事すうる
水もとよ國のうちふくらさんへ運れはきとり
あまのくにすりをすりかくまげきれぬ
はぐくまくあくまくちくりぐんのふと
あく新羅の王をとくわりくあれすり東に
神國あり日本とくうりそのくわにものすり
えれぢうりよくすく思ひくかの王をくみて皇
后れ帝船のまくありてゆくとくをくがむ
くまくくよくよくふくらめくわててまくを
神ノヤキ皇后モ國へ入るとして西アリ

あくへと封ト國乃指圖文書をより仕ひ
玉扇ノ内たゞ以舟八十艘とたゞもの高麗
百濟との二事この事とさへとせうをされてもす
もとそくびとまつりぬかくはくにうて仕
ひく十月玉扇どうとたゞもつり船ひきわゆ
やういれあふに舟
ゆう仕ひとゆまこれにすうち里ひがひうちみ
けり仕ひてぐう是と位よはんとじうはり船
ゆあらわらあらまといひでとひふるく
ゆざきとてうり舟北洋にて皇后とまちまと
月をれす
城皇后わねまふあする所ひ

ゆづりかふあたまうじとけり船ひと
皇后さへ絶ひとくとく玉扇とりぞれとまつ
船ひく武内の大臣も見せらまて南海の御事と
ゆく船ひとくかどさのく紀伊國ゆくと船ひと
きそあらとならじりんとたゞはひて皇后と
かく船ひとくとくせきとく船ひと船ひと
のあひとくとくとくとくとくとくとくとくと
きそははくのゆす武内の大臣とみかひひひ
とくとくとくとくとくとくとくとくとくと
あきかむのあひひひもひのとくとくとくと
月をれす
城皇后わねまふあする所ひ

印
江
縣
志
書

十六 應神 天皇

四十一年崩
歲年百十一

次ノ君がモ應神天皇トモアリヤリトの事は
御子ナリ仲哀天皇オノの内子ナム神功皇后ヨウハ
トマニ神功皇后ノ也世三年又東宮ヨリ立御成
四歲也庚寅ノ正月丁亥日位ヨリ也
七十一世トミテ四十年也八年
もナリ四月ヨ武内ノ大臣をナシ一ノナリト
ウタヒマツリセナリトナリトニシテ
ウタヒマツリセナリトナリトニシテ
内ノ大臣は玉位トシテ御成

ち祭石瀬これの主とがくひくねやけとある
ゆきにそよじしゆくわざと競うや
かくさんせんとくつてあめとすくのまよ
武内すげえとよのをもく心すくよはる
くと身とくひそんぞくゆうとすくのまよ
すま附よ壹岐直祖真根子といふものあつた
武内あはれあらわいひづりきの人のたまよ
トてのくかくと力もとくおすのりとつまきを
一とやなまへとおほよからうやくとまくと
てすくえいくさんがくとお武内ひくかよ都かく
くくふのあうきぬとやびよとくたち二人と

かくわくのくとせゆふ武内はれをゆよ
一とくわくわくとくとくうわくうふくはく
のたまとお

オナセ仁徳天皇八十一年崩年百十
葬和泉国百舌鳥野陵

はまれるよに仁徳天皇とよる應神天皇が四ノ丸
すゆかの皇后仲姫たり癸酉のと一正月卯年
に生れ、四年廿二歳とありぬす八十七年也。あの
ころその世を去る。死ぬとて、かくばくく住
とほきゆきゆきゆきゆくふゆづりゆくが家
あひゆく行むべとむすくことせとすぐ
まゆゆくかと東宮さづや食と一とくひ

御まえらがまのうとえりてかの東宮のそじ
おもゆてまくはりのいぢともかひか
あは後任には多岐に軍事方
よきれいふのよのあめれまうと見
竹元とありたえりと
年とやばめのうかられどもうのう
いとわく七年
内閣よりおもがりあ
内閣にまづはる
あまじとくとくをあま
多岐に軍事方
ちくらへんあくふよりあ

才十八履中天皇

六年崩

年六十七

十一

卷之六

はまはんじゆく
履中天皇（りちゆう）
とやまと
仁德天皇（じんとく）の五子（ごこ）也
皇后磐之媛（わか）也
仁德天皇廿一年（じんとく）より東宮（とうぐう）より立候

は年五歳庚子れども二月一日住に江原清
寧ニセをだりて六年うちやうせりや
すとおりいまと候つておひるのまゝ道よ革田宿
称ひしわゆ媛といふ人を仄せんゆが
はそれ往者仲皇子とすりてその日をいきよ
り有られ、あの皇子とがんばりてあま
りやうさんうりふあらきみくらうのむかはよも
もとからぬうりう比川きのえを宣ひ給ひての
よもよをりゆうりう比川きのえを宣ひ給ひての
よもよをりゆうりう比川きのえを宣ひ給ひての

のあはあはやまのまわへてもひまかせひて
もとよソヅキの時うへひまゆるた
のあははまのとよほひかせといはれ、又のあは
りつまかへにえりはをくじにまの玉みや
一人のまきまわる所アリとくがひまゆる
いほざうへどもの玉みやれよおうへりにわ
ぐはゆくはゆくはゆくはゆくはゆくはゆく
仲皇ふとあらへのちふきゆにてとのくまえ
やくはまづれ玉みやれりうかまくにかくと
住吉仲皇ふのちくはゆひゆうんをかくひて
ゑふもんとふきまくはゆばわと住とまくん時

なんぢと大臣ふるさんとの争ひへりとひくわす経
よきくがくへとくやへかくわくねぐとひく
ゑくじかんぢうもくとあうへてこれよえます
しとくはゆよそのもよきくもくあくは皇ふの
かくやよわくもくとほこさりとけくら病くもく
月前じの皇すうれんとあひがくとまのりてく
まや東まののアリカのへまがたかくらうりを
どとおもとあうへとあうへとくはりとくはりとく
それよたまの位よのがをほえてくふ大にとく
りせんとめまくちとがくくわくはくのわく
くるぐまくとあまくのまくのりくはくとく

のくじよ次よ大臣はすありよだりとねまくもを
まうりけひくさりてほきのとく位はすほほてのう
そのくらむりとくさきよあてたくまう殿なまふ
一すり五年九月よりよもあくらむくわくわく
てかくくはくよもくも風のぞとよてをすす
ねまくはくよもくも風のぞとよてをすす
まくまくしめくよもくも風のぞとよてをすす

十九反正天皇

六年崩年六十

葬和泉国百舌鳥耳原北陵

次君見ゆ反正天皇と申す仁德天皇第四子
履中天皇の内をもじ御母皇后盤之媛かり履中
天皇の御世二年正月よ東宮よ主被ふ古事記十履

中天皇の内子れどせうかとこねんとあふよ
多キよくだくまくせ候ひりおり丙午九年正月
二日位よにま候ひゆと一五十五世とくせ候ふ事
六年みづゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
九尺二寸五分仰とれりと一寸分かくとやくの
ゆりくもとくねくねくねくねくねくねく
まくまくとくねくねくねくねくねくねく
あくいゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ふのゆせよよよよよよよよよよよよよよよよ
おぐくわくわくわくわくわくわくわくわく
河内國塙垣のまくよばくよ

オサ 先恭天皇

四十二年崩 年八十

葬河内国惠我長野北原陵

次れみこと先恭天皇トヤヒニ仁徳天皇オヌカノ内子
内母皇后般若之媛ナリ壬子ノ也ト十二月よりつま
終ム廿年ニ十九セトアリ終ム四十二年よりあふ
のゑをセシムヒル大臣トヘリテ位スビ
君主モはキテ御子バモトテアリシニトアリ
ノミトスラリ所居モレバ御力ヒテく病
マニケリ御子の位モテウタリ即ムテキリ
ヒテキ事モテハアシナヒリと大旨以下かとモ
ウタモテアリと帝王ル御位ルシカニ
切ツトハアリ次トシバカニトモカニ

めますて正月よりおひなをゆくゆくわ
御ノ内十二月までみことねくまをわくと
御内もとおり一木ノ水とこうてぬうがひと
まともうり江戸へ行ひて宿すにまと住はせた
月ノ内月とばらくを終ふまゆる有志も
あびて往けをせしとすらむとおふき
ゆきをうちうじむじひくぬものとゆふうにあ
みのゆうひとおりくさりもとくねむせ
事よとまちをもとやど小ちのをもとくねむせ
もしりにひきりばくうひとお

あてまの事既と承とせあやせ候ひがまゆ
もかくとゆうて事もゆほひりとも御役と
はうりてセ度までうきよめのうほひり
モ又つひとくにりうきうかとの度
いきゆくと七日までじゆくとゆとくにりと
ほほりゆかくあらんとれあきゆきふをゆ
わめうちきうりゆひのまくとよとびゆゆの
かうりかくとくにゆくとゆくとびゆゆの
事ゆのゆきゆゆすゆねふとびゆ
あとゆりよはくとぞすとまくとびゆ
十二年たるゆにゆくとゆくとびゆゆの
新羅

よりゆくゆの事ゆくとゆくとびゆ
とくと樂人^{くわん}八十人ゆひとくとくとまくとびゆ
よえゆくとゆくとびゆゆくとくとくとくとくと
よくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
はどもととくとくとくとくとくとくとくとくと
舟二千ととくとくとくとくとくとくとくとくと
オサ一安康天皇 三年崩年五十六
葬大和國菅原伏見西陵

次承繼がゆく安康天皇とゆくと允恭天皇^{ヒコノミコト}也
御子ゆ母の皇后忍坂大中姫^{ヒカルノミコト}アマツナカヒメ
とゆくの東宮とうくとゆくとゆくとゆくと
官に位すはゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

あらまきふり三年すりあひの年比六月より
乃雄畧天皇の大泊瀬乃尼とことかれたやうにめ
よかさきとましもとゆとそざれ大草香乃尼と
人の口のとまきとまつりてみくわ
ほをすあそせりとまつりてみくわ
ふようすびてあはやすひとまけとい
すりぬせよやうすくあくまくとまく
人あすふとゆとえとまが
まくゆれざるこにそのがちれんわ
けかきあすりあひば
けかきあすりあひば

もあふとや候ひ。ば庶のまみふくらぬひと
そとかうゆまうゆるそくへ思ひゆきとや候
みとおわせれいとく根方すたうあるうる
うゆす眉輪まゆの王たれ。かまくまがその又
ともう。うとあうかじゆざめくらひとがう
そんくのよとあまゆれり。樓のあくに極む
あうえとさく行ひとぐうそくふくらひて庶の
ゆひとゆくかひてひよかやのびりをとく
りゆきりきりとくらてまゆよわうめやまた
てまくらく少く大臣のあよね。まくらく
のゆとくれあをうそこはすときていくまと

ねうとうれ大臣の家とくみくたかひ候ひま
ゆれりとくとくよりこれ候はんのゆくよ
ううかくとくじくあまげりうりとくとくとく
くびとくうてあねじ眉輪まゆの王七景とくらひ

孝太ニ雄略天皇二十三年崩年九十三
葬河内國高鷲原陵

次ノ見かど雄畧天皇とやさく先恭天皇と五
君と日本皇后忍坂大中姬とく内申れ。十月十
三日位ほはま候。仰年七十世とて終ふ。年三
年すりこのアラホもしまれ候ひ。時あれからん
月うきをかくねくねく後ひをく
てゆくれ人とあう。後ひ世うへ大恩天皇と申

き二年トヤセリ七月ヨリミテモウヒヤニモセシリ女
ホトヤヒトアヒシヨリクニシテヨリシヒトナ
キシカアヒトナヒメノヒタツケルヤシモトホトナ
スナリテモアヒトナヒメノヒタツケルヤシモトホトナ
年二月トヤセリニタクシヒツカシムトカトシモツル
シタクシヒツカシムトカトシモツル
人ソモモモレルモアヒトナヒメノヒタツケル人モトノ
ナモリヤヒニモ人モジタクシヒツカシムトカトシモツル
のチトシニシタクシヒツカシムトカトシモツル
ハシレハ神トアヒメハ神トアヒモトアヒモ
ヨウリヤヒトタクシヒツカシムトカトシモツル

タヒル神をくらまつてまつりカモセヤれ人モ
人モカモセカモトモアヒアヒトサニ年トヤ
トセ月ヨリモ清寧天皇モアヒタツケル
トセ月ヨリモ清寧天皇モアヒタツケル
カモセヤレ人モカモセヒツモリモカモセ

カモセヤレ人モカモセヒツモリモカモセ

カモセニ清寧天皇 五年崩年四十一

葬河内國坂門原陵

次ノスモ清寧天皇トヤセリ雄略天皇モアヒ子
母皇大夫人葛城韓姬也雄略天皇ノウセ大二年正
月ヨ東宮トヤセリ雄略天皇ノウセ大二年正
五年元モモモアヒテ立セトモアヒテ立
カモセ白髮皇子トヤセリヨリモアヒテ

公ありとてうちくらべにすぢられかふ寵ト絶
ひく東あよまでだまうりト也庚申ハチミン
正月四日位わ用ト修スル空年辛七世ハチセとすり御す
五年かりばくす位とはくト人すりトとすり
えとよつた國クニは收スルとすりト王孫ミタマともあ
れひト履中天皇ハシミツノミコトとト人ヒトニト播磨ハラマ
國クニよりおりアリて見ミるあくよまトとト皇子ヒヨコ
トトモトトひト

オ大四 飯豐天皇

崩位年崩年四十五
葬大和国垣内丘陵

ほく乃ホクノ乃ホクノ飯豐天皇ハシミツノミコト女帝ミツタマ
有アリゆト履中天皇ハシミツノミコト押羽皇ハシミツノミコト

忌媛クモリの臣ヒミツの玉タマあたタマさタマをタマ内ナカじシめアリすり
内ナカ安ハシマ媛ハシマり甲カタみれミテ二月ツキ位スル小度コドク政シヨウ位スル
トト四十五シジヌのススの脚ツバとトゆトりトかカとト位スル
ゆトりトくト脚ツバとトゆトりトはハとトゆトりトとト位スル
富トたトまトいトとト位スルトトりト三ミそトとト位スルとト年ヒ乃ホ
うち十月トガツより織姫ヒヅキひトかカひトくトとト系圖ケイツ
うトかカとトきトたトくトねネとトやヤとトうトけケとトぬヌとトうトびビとトびビ
かカとト日本記ニホンシとトくトまトうトりトくトゆトかカとトびビ
次タマトト門モ仰アハタりタリ

オ大五 顯宗天皇

三年崩年三十八
葬大和国磐石丘陵

次タマとト顯宗天皇カニムコノミコト飯豐天皇ハシミツノミコトトト伊イ

脇乃をもておもへぬもし又歳正月一日住すは
きはは四半ニ十六世とまうけあるニ年四丈のを
ノモア皇子ハ安康天皇乃ゆせニテヨリに安康
乃ゆどくこれ雄略天皇トモニテヨリとれまモ皇子
モテナシゆくにテヨリとれゆくもそのひす
ゆう丹波國へとげくゆくモテリヨリとせやと
わちよもじて才力あふた夷とちるキモチモテモ
モテ捕磨國へとけりてゆるどりとカドモウリの
はゆきつゝゆきりくと一月とまうけひし夜
よをくの夜あふの夜すとほくとくとく命とゆく
きそはあまそやうとむるよりとくとくとく

さんのはひふみふのゑあすと命とたりん
事つとくかくくあてととのゆまひあどみをくられ
君もまくは履中天皇乃山孫也男と若一もて人
よはくと馬牛とかふいもりうゆか多きもとあり
うておとくあひそんゆくとくすりとくの
まくもくあふやかくくとくとくとくとくとく
ゆうすく一兄の君りうとくとくとくとくとく
なまひとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
わゆくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

てまよあやめ此君り、是のうへとまよひ
ほけくまひはとさりれば、さへたるよ
すれどもに御、まつてまつてかわすら
かきうりとむてて御、あやめのうへとまよ
うめまつてそゆつて、おふみぬくらの王とし
くそまつて、おゆづて、清寧天皇とし
わくえりうび、うりゆひつまれ、すり往とさ
せよとあふの王とあまの主とまつて、
三ゆく清寧天皇、御、おまへとまよひ
御、おゆづてとゆすみゆづて、おまへとまよ
事に歸り、おゆづてとまよひに往る

ほくまくかくじゆくの飯豊天皇とほけくと
まくちゆくほくまくのうち、まめく
かくとまくとまくとまくとまくとまくと
住よつて、ほくまくその二月上日（さがつ）、お水
塞（ふち）のあこもせび、二年八月（はちがつ）、まくと
坐（すわ）の東宮（とうぐう）、お水のまくとまくとまくと
て、雄畧天皇（ゆうりょうてんのう）、かくとまくとまくとまくと
まくとまくとまくとまくとまくとまくと
お水の雄畧天皇（ゆうりょうてんのう）、お水の雄畧天皇（ゆうりょうてんのう）、

わうはり雄略天皇と清寧天皇のゆゑくことか
事もやつて位のびり清ひからでうそれてゆくと
わうれはりん見えりとやうりたまんまあるく
うはりゆきゆきとそのよふもくじひむす
これに因せねまう民やすくかよゆりき

オサ六 仁賢天皇 十一年崩年五十
葬河内國埴生坂本陵

次ノ君が世に仁賢天皇とよみ、顯宗天皇れども
ゆくれあふたり清寧天皇の御世三年四月
春宮より終る戊辰の日正月五日位よほせ給
ふ丙午年四十歳とぞうはり事十一年すりはみとの

ゆめりや南顯宗天皇のゆゑにあゝゆり
ぬゆふまめとぞくねくゆき

オサ七 武烈天皇

八年崩年十五
葬大和國像丘磐立北陵

次ノ君が武烈天皇とよき、仁賢天皇の母也母
皇后春日大娘かりに賢天皇七年正月、東宮よ
あうる年四十六歳戊寅年十二月よ位につきま
ゆ年十歳世とぞうはり八年その後人を一もせ
事あくべ夕乃もとくとくとくとくとくとくとく
ゆきとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

御子をとげて小引て板乃うへまく馬乃
板ノタキリモするどくセミをほゆそのがくよ入
まくまへ板とくふはととくふあくもとくふくと
やうても病ノタキリあくもとくふくとくふくと
ちくよれゆりきみうわきゆくくくう
きのねのうりせすりに年十八もう翁お
ひときゆふとれをくく

オ太ハ繼體天皇二十五年崩年八十二

葬福津國三島藍野陵

次のえりを繼體天皇トヤカ、應神天皇オハ御子
集總別皇子トヤカされ内子と大迹王トヤカモ
内子を私斐玉トヤカ又その御女彦主人の王也

トヤカ王の子とおのアラヒトヨウアリトス
母蟲仁天皇の七世の内ひよご振姫トリ丁亥のト
二月の位はまひゆ、丙午年五十八歳とちりほゆ二十
五年武烈天皇トセシヒトのう位と傳ぐるまへ
人々さうとたほとけづりて一矢下凡人をけきあ
仲哀天皇の五代の内ひまご丹波國トナヒトサウ
うれ王ともくちとけづりく位はもとまくと
てまくとくゆまくよまくとくとけづりふ見ゆくと
きづれをとくすひて山中よかくれぬひとも
ゆきがくとくすあくとれあくてありふくとく
宵よ越あゆ應神天皇の五代の内ひよこれ王

たをもつて又はまつて
まつりたる小おの王わぐくゆうじたかくと
あぐく小きよとくゆまゆんへくかこまう
やまひあくまつるすれりやありとくせきのほ
さくよまつりたるへくひもくかこまうてとの
トドリき玉これ事とうだひひむくじゆくと
二百二夜とすぐき後後ひきゆしの方へくかまね
内納り一時よゑつりゆひせりかくもと位と
えむくらほくさくかと大臣とすくじてあくが
ちふれりまつりかとはおよ位よつまく

御よりは内府取扱りをもつて

オサ九安閑天皇

二年崩年七十

葬河内國古市高屋丘陵

次ノアラセ安閑天皇トヤキ純體天皇代ニモ母
妃尾張貝子媛癸丑乃トニ二月よ位よほき陵
中ト六十八世トモリ位事二年位よほき陵
のくらへ宵よ祭やまとのち市郡よ移り

オサ宣化天皇

四年崩年七十二

葬大和國身狭桃花島坂上陵

次ノアラセ宣化天皇トヤキ安閑天皇方もよ腰
の内室トナレトニ病もし卯ノトニ二月よ位に
位をすふ四年十九世トモリ位事四年位つき
ままで二年トヨヒニ天台大師むアキあい

ノ内に仰り一とのうよナヘンアリ

オホ一欽明天皇

三十二年崩

葬大和国檜隈坂合陵

次はんかく欽明天皇トヨタキ、安閑天皇の内わ小内。
皇后キ白香也參亥歳位トハシテ御世トテアリ
事十三年。十二年トヤリ。百濟國より佛經ニ
トリテアリ。又トモアリ。ひびひてゆきとあざめ
おひり。せやウルヒナリ。人ねぐくもづ。ミ
キ尾興乃大連トリ。ソリ人佛法とあり。しるゆア
コヤマヒ。セヒナリ。トトドリ。寺とやさしき。カ
ム。かじる。云候。アリ。アリ。内裏ヤナク。大
速。被。あらま。アラマ。アラマ。佛壇がどわ。アリ。

き繚體天皇の内せよ。とうあううり人ヨリ。アリ。佛
をね。アリ。テ。モアリ。アリ。アメたこ。アリ。う。モ
うれ。内の人。モア。ア。の。佛。ト。モ。ア。リ。モ
キ。モア。ア。次。又。セ。ヤ。ア。モ。ア。マ。リ。経。ツ。モ。ア。リ。ア
エ。は。出。せ。ア。リ。セ。人。佛。法。ト。リ。モ。ア。リ。エ。ア。モ。ア。リ。
一。世。二。年。ト。ヤ。一。小。聖。德。太。子。モ。ア。リ。まれ。ア。モ。ア。リ。
内。ち。け。用。明。天。皇。ト。ヨ。タ。キ。ア。リ。モ。ア。リ。佛。の。ア。レ
セ。ト。ア。ス。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。
ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。
ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。ア。リ。

とくにゆきまつりの日がすこしもあらへぬ
わがまんがひめのまつりはあらへぬ
かどりわいふとさくまつりのまつりは
人今てまつり月とまつりはあらへ
ね十一月十五日とまつりはあらへ
たとわびとあわせとまつりは
まのまつりはあらへ
かどりわいふとまつりのまつりは
女まとまつりはあらへ
玉よ入るまつりのまつりはあらへ

りんとくはひめをもうきよみくえをくち
て壁すよきりてゆくにかうてのぼりてさうやと
こもととくあきりと四ひりいとくすん
ちとひもとくがふすとよひくまほとくよれふ
じうとりもくへくはつひがまとねむといぐ
なぞのせきすりてふゆうきらてきのひよ
うやうりそのめきくばだきあわとくんき
あゆくそれうくさうふとくまくとく中
くちくはくとけのまくとくせく
ゆりま

文政十二年五月廿日

中村直道

